

優良賞

「知る」ということ

桶川中学校三年 関根 百花

みなさんは、「LGBT」という言葉を知っていますか。聞いたことはあるけれど、深くは知らないという人がほとんどなのではないのでしょうか。

「LGBT」とは、恋愛対象となる性と自分が思っている自分の性が同じである人や、自分が思っている自分の性と、身体的な性が異なる人などの総称のことを言います。

二〇二〇年九月、私の好きな俳優さんが、「LGBT」の「T」であるトランスジェンダーを演じた映画が公開されました。公開前から気になってはいましたが、その映画は、小規模ながらもSNSやウェブページでの評価が高く、「絶対に見るべき。」

というコメントがたくさんあり、さらに見てみたいと思うようになりました。でも、近くの映画館で公開がされなくなる日まで、私はその映画を見ることはありませんでした。

一つの理由は、ウェブに寄せられた映画の感想の中に、「必ず泣く。」

と書かれており、誰かと一緒に見に行くには難しい映画だと思ったからです。しかし、それはただの表面上の言い訳にしか過ぎず、心のどこかで私は、「LGBT」のことを知るのが怖い、好きな俳優さんが女装しているなんて：という、ある種の差別をしてしまっていました。自分では見たいと思っていたし、これからの自分のためにも見なければならないと分かっていました。しかし、心の奥底にある、その愚かな偏見は、映画を見ることを妨げたのです。

「自分は人と平等に接することができているはずだ。」
と、心の中で自負していたからこそ、自分の本当の気持ちに気付き、ショックを受けまし

た。

その後、日に日に映画を見なかったことへの後悔が増していき、思わず、その作品のノベライズ本を買い、読むことにしました。一日少しづつ読もうと思っていました。たつた二日で読み終わってしまいました。一度読み始めると引き込まれる、そんな作品だったので。なぜスクリーンで見なかったのか、また後悔が募ってしまいました。例えば自分と何か違う点があったとしても、その人は同じ人間であり、今日も同じ世界を生きている、と、本の中の主人公に教えてもらいました。

私が、この体験を通して伝えたいと思ったことは、「知る」ということです。

何事も、知らなければ、それに賛成することも、反対することもできません。当たり前ですが、「好む」ことも、「嫌う」こともできないのです。

世の中で確かに生き、もがいている人たちのことを、現実を知りたくなくて避けてしまった私のように、みなさんは、その物事や人のことを深く知らずに批判したり、嫌ったり

していませんか。

「LGBT」と呼ばれる人たちは、今日も悲しい偏見や差別に苦しんでいます。特に日本では、「LGBT」の人々への理解度が、世界の中でも低い方だと言われているそうです。私は、この偏見や差別の裏側に、「無関心」というものがあると思っています。「LGBT」の人たちが堂々と生きることのできる世界への第一歩は、知ろうとすることです。

私も、今回の出来事を通じて見つけた、少しの「差別の心」を流してから、いつか再上映されるであろうその映画を、見に行こうと思います。